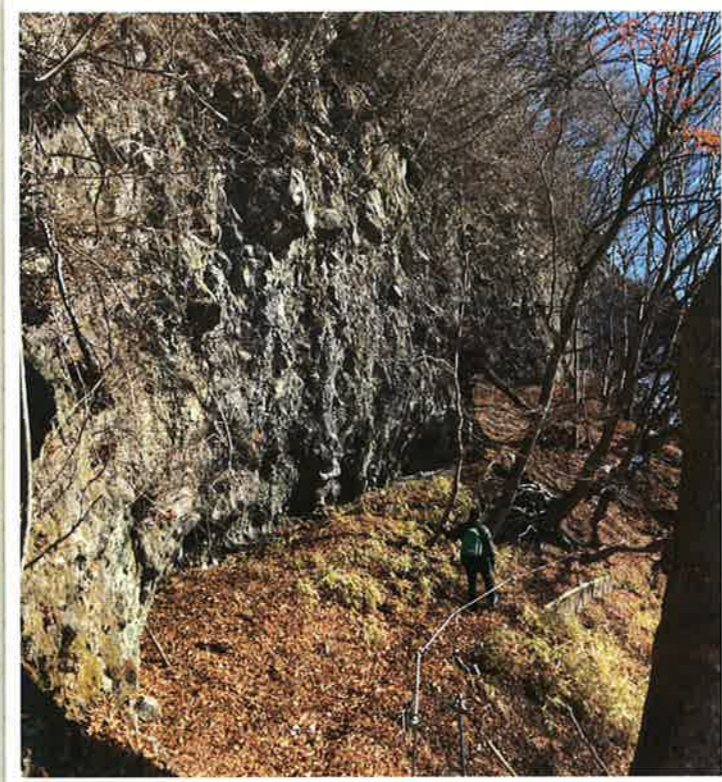


王城山の7不思議・その1

ヤマトタケルも立ち寄った!?
「御籠岩」と「神の水」



王城山を登っていくと、7合目を過ぎたあたりからむき出しになった岩壁や、足元にもゴロゴロと岩石が目立つようになり。これは、王城山や連なる高間山など一帯が、約120〜90万年前に活発化した噴火活動によって形成された山であることを示すものです。特に9合目には、幅数十メートルに及ぶ大きな岩壁が続きますが、この場所は「御籠岩（おこもりいわ）」と呼ばれ、その昔、日本武尊（ヤマトタケル）が東征の際に駐屯したと言い伝えられています。崩落や堆積が進み、岩陰は一部が見られるのみではありますが、火

山の噴出物が固まった凝灰角礫岩の岩壁は今でも十分な迫力！神話のヒーローが立ち寄っていたとしてもおかしくはありません。

「御籠岩」の先、左手道下には湧水池があり、これも日本武尊が手を洗ったとされることから「御手洗の池」と呼ばれています。この水を井戸にそそぐと神と一体の生活が営まれると言われたため、村人はお祭りの際にご神水として持ち帰りました。土地の人にとっても王城山は、清水の湧く、水分子（みくまり）の山としても大切な存在だったのです。

王城山の7不思議・その2

王城山神社の始まりは
信州の諏訪大社から!

わばセットで「王城山神社」となります。また、この「王城山神社」という社名も明治以降のもので、それより以前は「諏訪神社」と呼ばれていました。

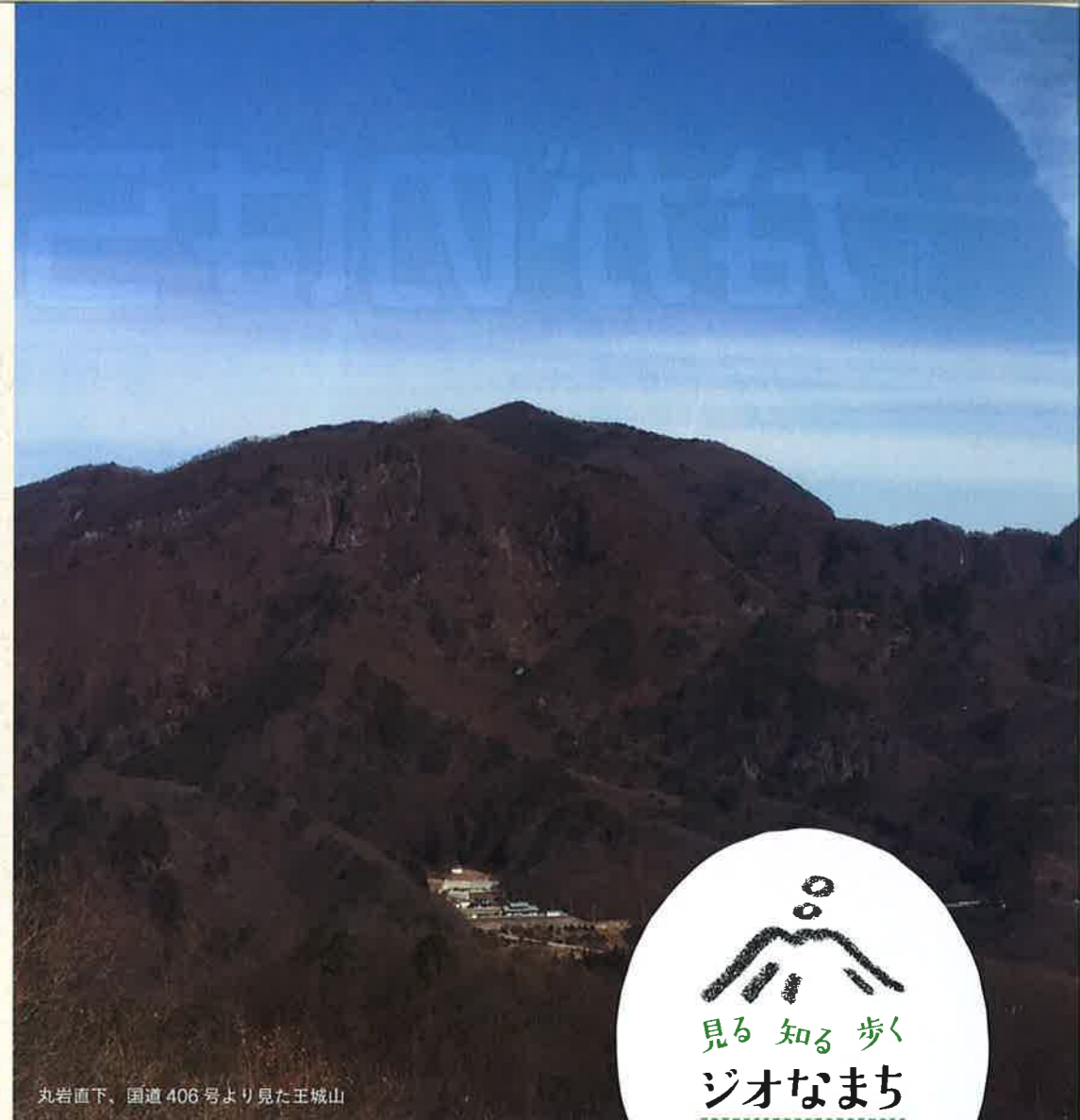
初期の岩櫃城主・吾妻太郎藤原行盛が、

王城山のふもと、信州諏訪大社を勧請（※）し、領内の旧街道沿いに建つ王城山神社。樹齢400年を超える大木「神杉」や、夏の祭には「だんご相撲」が行われることで有名ですが、王城山にはもうひとつ、山頂にもお社があります。山上の社は奥宮（上社）、ふもとの社は里宮（下社）で、い

もとは諏訪大社の末社であった王城山神社。諏訪大社同様、上社と下社、両方へ参詣したほうがご利益があるのかもしれません！



※祭神を分霊し移すこと



丸岩直下、国道406号より見た王城山



vol. 12

神の山・王城山にまつわる
7不思議

〔王城山と王城山神社（奥宮・里宮）〕

吾妻川の左岸、林地区の背後にそびえる王城山。標高1123m、「ぐんま百名山」のひとつにも数えられ、頂上まで片道1時間45分ほどの登山道は整備されているため歩きやすく、町外からのハイカーにも人気のコースとなっています。しかしこの王城山は、単にハイキングに適した山というばかりではありません。林地区をはじめふもとに暮らす人びとは、古くから「みこしろやま」と呼び、社を建て、神様が籠る山として崇拜してきました。王城山は、なぜ神の山と呼ばれ、崇められるようになったのでしょうか。今も続く祭礼や言い伝えなどを通して、王城山の数々の不思議に迫ります。



7 王城山の7不思議・その

7合目から運び 降ろされた手水鉢

里宮の境内には手水舎とは別に、鳥居をくぐった右手に、岩を丸くくり抜いたような手水鉢があることをご存知でしょうか。聞くところによるとこの手水鉢、王城山の7合目付近の崩落によって散乱する「焙烙岩」をここまで運んできたものなのだから！一見して非常に重たいものであることがわかりますが、重機もない時代、誰がどうやって運び降ろしたのか…。王城山にはまだまだ説明されていない不思議がたくさんあるようです！



◎今回訪れたのは…

林の王城山と王城山神社(奥宮・里宮)

参考文献:「長野原町誌」、「長野原町の民俗」(1987年/長野原町)、浦野安孫氏提供資料

6 王城山の7不思議・その

由来は「団子」? 「男子」? 神様の前で力比べ!

里宮で行われる秋祭りのメインイベントは、子供たちによる「だんご相撲」です。昔は、米の粉で作った人形を子供たちが参詣者に投げたことからこの名がついたとされ、いつからかそれが「男子」による相撲に代わったのだとか。神前で相撲を奉納し、勇気と力を授かるうとする祭儀相撲は各地で見られるものですが、この「だんご相撲」は、実際に子供たちに競技をさせ、体力や力比べを兼ねている点が特徴的です。王城山神社の前身の諏訪神社は武勇の神。その神様へ奉納することで、子供たちの健康と健やかな成長を祈る気持ちは、昔も今も変わりはないでしょう。



3 王城山の7不思議・その

「神杉」とあの戦国武将の 関係は…!?

その②でも触れたように、神の山・王城山も、吾妻領有を巡る争いと無縁ではないられません。近年、神社近くの林地区内に、中近世の城郭跡が発見され、その「林城」と当時の諏訪神社との関連に興味を持たれています。また、武田方と上杉方が戦った長野原合戦の前後には、王城山の山頂には城塞があったとされ、今も2つある山頂のうちひとつは「古城」とも呼ばれています。歴史書『加沢記』によると、1563(永禄6)年、岩櫃城の攻撃に際し、真田幸隆軍が「林の郷、諏訪の森に本陣をおく」とあります。この諏訪の森とは、諏訪神社(現王城山神社)下社のこと。そこで思い出されるのが、境内に今も残る「神杉」と呼ばれる杉の大木。樹齢はおおよそ450年と見られることから、真田軍が陣を構えた年とほぼぴったり!もしや名将・真田幸隆が自ら武運を願って、または勝利を祝って、この杉の苗木を植えたのかも!などと、想像してみるのも面白いものです。



5 王城山の7不思議・その

今も山上に残る 「虫切り鎌」はなんのため?

毎年8月25日〜26日に「奥宮大祭」、27〜28日にかけて「里宮大祭」が行われる王城山神社の秋祭り。「奥宮大祭」では、25日に参列者のための山道を整備する「お庭刈り」と、山の神様を招く「お飯屋」を作ります。26日の大祭の祭典では、宮司を先頭に参列者が石祠とお飯屋の周りを時計回りに7回まわり、五穀豊穡を願って拝礼します。この日、赤ん坊のいる家では、山上の石室にある「虫切り鎌」を借ります。この鎌を赤ん坊の前でX字に切る真似をすると疳の虫が治るとされ、借りた鎌は翌年、倍にして返します。この儀礼は、吾妻太郎が歿じたという実鎌が由来とされていますが、今でもいくつかの鎌は山上の石室のなかに残されており、氏子たちが伝承を大切に守り抜いてきたしるしです。



4 王城山の7不思議・その

岩窟で厳しい修行を おこなった修験者たち

※寺院が神社を管理すること

神仏習合の時代諏訪神社(現王城山神社)は、林の大乗院・浦野家が別当(※)を務めました。真田氏とゆかりが深く、真田の当地領有に際してその少し前にこの地に移り住んだと言われる浦野家は、その後の江戸年間、さらに明治の神仏分離では神職となり、400年以上にわたって神社の祭祀にあたってきたことになりました。大乗院は、吾妻を代表する修験道の寺院でした。修験というとまずイメージするのは山(もり)などの厳しい修行。詳しいことは伝えられていませんが、たしかに「御籠石」をはじめ岩壁が連なる王城山の険しい山峰は修業の場に適していたと思われまふ。王城山を霊山とする山岳信仰は、修験という祈りのかたちにも引き継がれてきたでしょう。



ふるさと 再発見

[12]

—文化財だより—

【早春の妖精 カタクリの群生地】

季節は若葉が芽を出し始める四月の中頃、北東向きのなだらかな斜面のクリ・コナラの木の下面にピンク色の花が咲く。面積0.3ha、その数は10万株を悠に超すと思われる。これが、林地区のカタクリの群生地である。カタクリの花の淡いピンク・葉の淡緑色とアズマイチゲの白色のコラボレーションは見事である。一周500m程の観賞用の遊歩道もできており、歩くにつぶさに見られる。カタクリの花は早春に二葉を出す。その間から長い花柄が出て、赤紫色六弁の美しい花が下向きに咲く。その色と姿をたとえて、「早春の妖精」とも呼ばれている。日差しとともに開花し、日差しがなくなると閉じる。二週間程度で枯れてしまうので四月中旬から下旬にかけて見頃となる。林地区では数年前から四月中旬に「カタクリ

祭り」を開催しているので、訪れるには良い機会である。

現地へ行くには、王城山トンネルと長野原町立第一小学校の間あたりで町道と交差する沢に沿って200mほど登ると到着する。

